

The Art of Karel Ančerl IV

スメタナ

Bedřich Smetana 1824 - 1884

連作交響詩『わが祖国』より第2曲 モルダウ(リハーサル)

CD 1

- ① “Vltava (The Moldau)”, from Symphonic Poem “Má Vlast” ~Rehearsal 48:25

連作交響詩『わが祖国』より第2曲 モルダウ(本番)

- ② “Vltava (The Moldau)”, from Symphonic Poem “Má Vlast” ~Concert 12:34

管弦楽: トロント交響楽団

モノラル録音: 1969年2月5日

Toronto Symphony Orchestra

Monaural Recording: 5 February, 1969

連作交響詩『わが祖国』(全曲)

CD 2

Symphonic Poem “Má Vlast”

- ① I. Vyšehrad 13:52
② II. Vltava (The Moldau) 11:49
③ III. Šárka 9:59
④ IV. Z českých luhů a hájů 12:04
⑤ V. Tábor 12:31
⑥ VI. Blaník 13:29

【お詫びと訂正】
CD2「わが祖国」(全曲)録音日
誤)1968年5月2日→正)1968年5月12日

管弦楽: チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

ステレオ録音: 1968年5月2日

Czech Philharmonic Orchestra

Stereo Recording: 2 May, 1968

指揮: カレル・アンチェル

Karel Ančerl (conductor)

トロントのカレル・アンチェル

(1969年~1973年)

ルネ・トレミヌ

カレル・アンチェルは、1951年12月から1968年まで途切れることなく、名高きチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の指揮を執り続けていた。彼は、すこぶる有能なこのオーケストラを引き連れ四大大陸を股にかけて巡り、1965年のツアーではアメリカ、1959年にはオーストラリア、ニュージーランド、中国、日本、インドへ赴き、東西ヨーロッパのあちこちでも演奏を重ねていた。客演指揮者として演奏会へ招かれることもあり、1968年8月17日(土曜日)にパークシャーで催されたタンゲルウッド音楽祭へ招かれた際は、ボストン交響楽団の指揮を執った。演目はグルックの《オーリーアのイフィジェニー》序曲、ショスタコヴィチの交響曲第1番、ドヴォルザークの交響曲第8番であった。

ほぼ同時期、悲劇的なできごとが彼の母国を震撼させていた。7月15日、ソビエト連邦と東ドイツ、ハンガリー、ブルガリアの指導者たちは、ドゥプチェクに反社会主義を廃止するよう要求していた。ドゥプチェクの改革運動はソビエトの政治体制や共産党の政策方針と対立するものであり、ソビエトの指導者たちにはとうてい受け入れられるものではなかった。8月10日、チェコ共産党は民

主集中制すなわち正統派マルクス主義に終わりを告げる法律を採択。このドゥプチェクの改革運動はチェコスロバキアのソ連ブロック離脱を誘発する恐れがあったため、ソビエト連邦はワルシャワ条約機構軍を集結、8月20日にはロシアの戦車がチェコスロバキアへ侵攻した。市民に支持されたドゥプチェクの「プラハの春」は流血の惨事に終わり、民衆からヒーローと称えられていたドゥプチェクは共産党から追放された。4万人が犠牲となったプラハの悲劇から12年後、歴史はくり返されたのだった。

この事件はタンゲルウッドにいたアンチェルの耳にも届き、すぐさま彼は帰国を断念しカナダへ亡命する。12月12日にはトロントで会見を開きこう語った。「チェコスロバキアへは戻りません。トロントで新たな生活を始めます。妻のハナ、長男イジーと嫁のインドラはプラハを離れ西ドイツのシュトゥットガルトで無事でおります。手続きが整い次第こちらへ向かう予定です。コペンハーゲンにいる次男のイヴァンもこちらへ合流する予定になっています。ハナやイジーやインドラがプラハにいる間は不安でいっぱいでしたが、家族がもうすぐこちらへ到着できると聞きとてもホッとしています。ハナは喜んでおられません。おわかりになるでしょう、住み慣れた家を離れるのですから。指揮者である私は妻とは状況が違います。1969年からこちらのオーケストラで指揮を執ることはすでに決まっておりましたし、こちらに来るのが予定より1年早まっただけのことです。しかし、ハナにはあまりにも唐突で衝撃的でした。我々

の友人がブラハに行き国を離れるよう妻を説得しましたが、なかなかすぐには首を縦に振ってくれませんでした。決断するのに2日かかりました。今は息子たちやインドラと合流して落ち着いたようです。全てうまくいくと信じています。」

1967年12月21～22日、アンチェルはすでにトロントでドヴォルザーク、スメタナ、ブラームスをメインに据えたプログラムを披露していた。そして、1968-1969年シーズンの終わりにチューリッヒのボー・オー・ラックで、小澤の後任としてトロント交響楽団音楽監督への就任契約を交わした。実際、アンチェルは10月14日に行われた1969-1970年シーズンの最初のコンサートの直後にこの楽団の常任指揮者に就任した。曲目は、スメタナ《ヴァレンシュタインの陣営》、フィルクスニーによるピアノでシューマンのピアノ協奏曲、そしてドヴォルザークの交響曲第6番であった。

1968年9月23日の火曜日、アンチェルはトロントで2回目の記者会見を開き家族を紹介した。「アンチェル家再会」という見出しのもとトロント・デイリースター紙はこう綴った。

「昨日午後の記者会見では、新天地での生活が始まった家族を紹介するカレル・アンチェル氏の様子はとてもリラックスしていて嬉しそうだった。その理由は明快だ。チェコ人であるこの指揮者の妻ハナ夫人、息子のイジーさんとその妻インドラさんが、ブラックマーケットで入手したビザでチェコからウィーンへと渡り、この週末にやっとトロントへ辿り着いたからだ。次男のイヴァンさんも本日、ロンドンから到着する予定である。『皆、軍

の侵攻に衝撃を受けました』とイジーさんは述べた。『しかし、若者は街頭に集結していました』とアンチェル氏は誇らしげに付け加えた。イジーさんはうなずき、『ロシア兵たちとも話をしました。彼らはどこにいるのかもわかっていないようでした。2年も軍事作戦を行っているのですからね。西ドイツかポーランドにいたと思った兵もいるでしょう。笑っちゃいますよね。ロシア兵たちは『兵士の心得』と書かれた本を持っていました』。侵攻が起きたとき、アンチェル家の人びとは別々の場所に滞在していた。カレル氏はアメリカに、イジーさんとインドラさんはブラハに、ハナさんは夏の別荘のある南ボヘミア州で生活していた。イジーさんはまず自家用の大きなメルセデスベンツでインドラさんをオーストリアとの国境へ避難させ、続いて母親を迎えに戻った。『ロシア軍によって閉鎖されていない国境があったため、みんな避難することができました』とアンチェル氏は説明。『もっとも国境警備員のほとんどが国外逃亡する国民に対して協力的でしたけどね』アンチェル家には、インドラさんの両親を含めてチェコスロバキアに残っている親族がまだいるが、カレル氏はカナダで暮らしていくことを明言した。『ここでの生活スタイルはこれまでと全く違います』と彼は言った。『私の妻はブラハにいつかは帰るつもりでいます。しかし私はもう60歳ですしここで十分です』。アンチェル氏の指揮者生活にも支障はない。小澤氏の後任としてトロント交響楽団の音楽監督に就任するのは来年の秋だが、客演指揮者契約や常任指揮者就任の依頼がヨーロッパ中から来てい

るという。『もちろんそれらの仕事は受けませんよ』とアンチェル氏は語った。『ここに住むと決めたんです。2月にヨーロッパでのツアーがあるので、客演指揮の仕事はすると思います』

数か月後の1969年3月11日、カナダのトロントスター紙がアンチェルの指揮者任命のニュースを正式に伝えた。

『吉報。小澤征爾の後任がはかならぬ著名なチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の指揮者カレル・アンチェルに決定した。彼の人物像は小澤とはかけ離れている。グレーの髪は明らかにビートルズのようなではないし、指揮台に上がった姿は時流の先端をゆくような前任者とは全く別物だ。そしてまた今の我々にとって、アンチェルこそ必要な指揮者なのかもしれない。感性で奏でる音楽の4年間を経て、円熟したヨーロッパの音を権威のある者から学ぶときが来たのであろう。さらに言えば、現職の指揮者よりもはるかに多くの経験を重ねてきた指揮者を迎えることになるのは疑いの余地がない。上記のことから我々は何が期待できるのだろうか？ まずは、気がかりな点を挙げてみる。アンチェルは、小澤のような若々しさあるいは聴衆が劇場に足を運びたいような魅力は持ち合わせていないかもしれない。また彼のレパートリーはすでに膨大で、カナダの観客にむけて新しいレパートリーを増やす気はないかもしれない。さらにチェコ市民権の問題もある。鉄のカーテン政治は、北米でのレコーディングやツアーを行う妨げにならないだろうか？ 北米のオーケストラとコミュニケーションをとるうえでの障害はないだろ

うか？

こういった疑念について、私が全ての解答を持ち合わせているなどと知ったかぶるつもりはないが、様々な論拠から希望はあるのではないと思う。ひとつには、『音楽と音楽家に関するグローヴの事典』にアンチェルは“チェコの指揮者で現代音楽の伝道者”と記されていることだ。手垢のついた時代ものの音楽を聴かされるのはうんざりだと思っていた面々は胸を撫で下ろすことだろう。さらにまた、興行成績は少なからず個々のパフォーマンスの良し悪しに関係する。昨年アンチェルがモントリオールとトロントで公演を行った際、私が話をした誰もが同世代の指揮者のなかでも第一級であると疑わなかった。政治に関してだが、チェコ当局がどう動くかが今後の彼のトロント生活を左右するだろう。去る11月にアンチェルは、自分の父親は忠実な王党派であるが自分自身は政治への関心は全くないと語っていた」

こういった疑問への答えはわずかに4年後に出た(ワシントン・イブニングスター紙、1972年4月17日)「冷たい機械が人間に」

……「トロント交響楽団が前回ワシントンに来た際、小沢征爾が音楽監督として完璧かつ壮大なベルリオーズの《幻想交響曲》を披露し、絶大な感動をもたらした。しかし、このカナダのオーケストラがケネディーセンター初演に臨んだ土曜日、チェコ人指揮者カレル・アンチェルが指揮を執った同楽団の印象は全く違うものになった。アンチェルが指揮者に就任して3シーズン目を迎えた現在、楽団の演奏は小澤が指揮を執っていた時ほどの精

密さはない。マーラーの交響曲第1番の演奏で十分に見せたように、管楽器、パーカッションは今も一流だが、弦はアンチエルが求めているような均一なまとまりのある音になっていない。しかしながら、小澤からアンチエルへの指揮の継承が、楽団の進化を大きく後退させたというのとも違う。



以前の冷たく精密だった機械から、人間味が表出てきたにすぎないのだ。マーラーは時折とり散らかってまとまりが悪く聞こえたが、その一方で心を揺さぶられる部分もあった。アンチエルは非常に繊細な心配りをもってマーラー第1番を振り進み、音の波は時としてドヴォルザークのブラハ

よりもマーラーのウィーンを彷彿とさせたが、観客の共感を得た」

アンチエルは、トロントスター紙に自分の芸術信念についてこう語っている。

「今まで生きてきた中で3度、オペラはもう廃れたと言われた時期があります。1度目は第一次世界大戦後、その次はトーキー映画が公開されたあと、最後はテレビの登場でした。しかし今日、オペラはまだ存在し、伝統を重んじるメトロポリタン劇場でさえ、ヤナーチェクはありえないにしてもベルクの《ヴォツェック》は上演されました。ラジオの普及でオペラが消えてしまうと言われたりもしましたが、私はそんな心配はしていません。レコードを聴くのと生のコンサートを聴くのは雲泥の差です。ベッド脇に恋人の写真が飾られているだけか、それとも恋人がすぐ隣にいて愛し合うことができるかくらいの違いがあります。オーケストラの終焉についても似たような予測がされたりしました。ラジオもレコードもオペラの人気に影響を落としたりしませんでした。実際、レコードとコンサートはお互いの人気を相乗的に高めていったように思っています。この点で常に一過性の流行と結びついているポップミュージックとは違うんです。シンフォニーは流行ものではありません。永遠であり続けるでしょう。世界中の若者の間でオーケストラへの関心が高まってきており、オーケストラに終わりはないと思えるのです。唯一心配なのは将来の資金繰りです。富裕な組織や個人資産家は我々オーケストラを支援し続けてくれるのでしょうか？ もしそれがだめなときは、政府

は援助の手を差し伸べてくれるのでしょうか？ これは北米に限っての心配事です。ヨーロッパでは政府が主体的な支援者となっているオーケストラがほとんどです。

音楽芸術に対する私の考え方はほかの指揮者とは少し異なっています。私はオーケストラの演奏者と同等であって、自分のほうが優れているなどと思ったことはありません。指揮者はプリマドンナになるべきではないと考えています。私がベルクやウェーベルン、シェーンベルク、そして彼らのあとに続く音楽家たちの新しい作品をブラハに紹介するためにこの仕事を始めたなんて、私を保守的だと思っている人たちの多くには信じられないでしょうね。長年の経験を通して、観客は世界のどこでも同じなんだと知りました。現代の楽曲のみで構成されたプログラムをひとシーズンに1回や2回演奏するくらいでは観客は満足しません。近代音楽をほぼ全てのプログラムに織り込んだほうがいいんです。シーズン中いつもカナダ人作曲家の新しいスコアを読んでいます、今の曲の多くはベテンだと思います。新しくして価値のある楽曲を見つけるなんてことは、私にとって難儀な作業です。今のところまだ人間でいられてますが、現代音楽を演奏するには電子機器にでもならなければならないような気持ちになることもあります。音階も楽曲形式もないわけだし。芸術の世界ではアーティストと観客のどちらが正しいのか定かではありません。何年前か、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団との演奏旅行で、カペラーチの《時の神秘》という素晴らしい作品を指揮しました。この曲は

譜面上とてもロジカルですが、偉大な音楽家G.セルがこの曲を初めて聞いた際この曲は全く知的ではないと思ったそうです。《トリスタンとイゾルデ》を初めて聞いたときの私もスコアを理解していなかったのですが、セルが感じたのと同じことを思いましたかね。

オペラの指揮にも興味はありますが、リハーサルの時間が足りなかったり、ソロ歌手が時間に余裕をもって到着しなかったりしてアンサンブルに乱れが出てしまうのは嫌なのです。即興は好きではありません。でも、もしヤナーチェクのアペラ演奏の依頼がきたら、つい引き受けてしまうかもしれません」

アンチェルは、最低でもシーズンの半分である15週間はカナダで指揮を執る契約をしていた。トロント交響楽団を率いた4シーズンで170の公演を行ったが、体調が優れず中断することがたびあった。実際、糖尿病と肺の病を患っていたのだ。ドイツの強制収容所での年月が健康に与えた影響は大きく、1975年8月には全ての活動を中止するつもりでいた。しかし運命は彼にそれを許さなかった。

アンチェルはこの時期、ヨーロッパのオーケストラやアメリカの一流オーケストラにも指揮者として招かれた。1970年の1月から2月にかけて、アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、ウィーン交響楽団など共演するため西ヨーロッパに2か月滞在。3月にはサンフランシスコ交響楽団で2週間過ごし、1971年の1月から2月にはイスラエル・フィ

ルハーモニー管弦楽団の指揮を執った。同年10月クリーヴランド管弦楽団の指揮台に上がり、年末にはニューヨーク・フィルハーモニックと2週間の公演を行った。タンゲルウッド音楽祭にも幾度か戻り再びボストン交響楽団と共演し、ロサンジェルス・フィルハーモニックの指揮も執った。

アンチェルのカナダでのレパートリーは、ドヴォルザーク、スメタナ、ヤナーチェク、マルティヌー等の偉大なチェコ人作曲家はもちろん、古典の作曲家の楽曲も決しておろそかにせず織り込んでいた。1970年6月ベートーベン・チクルスを演奏、1972年5～6月のブラームス・フェスティバルでは《ドイツ・レクイエム》と《アルト・ラブソディ》も披露。ほかにドヴォルザークやモーツァルトやヴェルディの《レクイエム》だけではなく、《ミサ・ソレニムス》やドヴォルザークの《スターバト・マーテル》も演奏した。今世紀の作曲家としてはブリテンの《戦争レクイエム》、オネゲル《火刑台上のジャンヌ・ダルク》、北米の作曲家ではベニン、ウィラン、ターナー、コーブランド、カウエル、ベックウィズの作品も演奏した。モーツァルト、マーラー、シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、ブルクナートの交響曲に加え、ラロ、ドビュッシー、ラヴェル、イベール、オネゲル（交響曲第3番『典礼風』）、メシアン、ジョリヴェなどフランス人作曲家の作品レパートリーも豊富だった。

ほかの指揮者たちと同様に、レコード業界はアンチェルがレパートリーとして持つ全ての曲を収録することはできなかった。シェルヘンのように、アンチェルのレパートリーは17、18世紀から当時

最新の現代作曲家にまで及んだ。レコードに収録されなかった曲は幸い、様々な放送会社の録音資料からCDにおこすことが可能となった。今回の3枚のCDもそのひとつである。これに続くCDシリーズでは、スプラフォンに収録されなかったもののカナダで保存されていた曲が収録される予定である。

1973年5月、体調不良が続くアンチェルは活動を制約せざるを得なくなったため1974-1975年シーズンの契約更新が無いことを発表した。1973年、7月3日に65歳で逝去。このニュースにカナダ国民は深く衝撃を受け、彼の人物やプロとしての資質、体調不良や逆境の年月を経てなお情熱的で楽観主義者であり続けたことを称賛した。ある地方紙は短く伝えた。

「自らの人生と音楽を通じ、生来の高潔さと勇気をもって芸術と自由を守りぬいた。ナチスによって家族全員を殺害され、何年にも及んだ強制収容所生活で残酷な経験をしたにも関わらず、究極の文明人でありつづけた」

「今週カレル・アンチェルが亡くなったが、これは音楽界にとっては名高い熟練者の、そしてカナダにとっては最も重要なひとりの音楽家の喪失を意味する。トロント交響楽団と市民が信頼に足る音楽指導者を必要としていたとき、彼はトロントへ降り立った。小澤は輝かしい指揮者であった。音楽を作ることを楽しみ、お気に入りの楽曲を彼が譜面から読み取ったとおりに観客の心をうち震わせた。しかしトロント交響楽団は小澤氏のもとでは成長しなかった。指揮台に立った小澤氏によっ

て、ときに彼らは見事な音楽を奏で、ときに時代のプロレベルからみると相当下回るような演奏をした。

アンチェルの最初の仕事は、オーケストラに誇りを持たせ楽団として進むべき方向性を示し、奏者と——より重視されるべきこととして——観客の音楽性を突き動かし進化させる点にあった。アンチェルによって、トロント市民は偉大なクラシック音楽の数々を学び知ることができた。観客は雨あられのような音の洪水よりはるかに満足感の得られる音楽の楽しみ方を習得したのだった。次第にオーケストラの音質は、キラキラ輝き朗々とした小澤流からアンチェル好みの丸く甘美で中央ヨーロッパ風なものへと変化していった。アンチェルはこの仕事にたいして慎重に思慮深く無限の忍耐をもって取り組んでいた。

彼はオーケストラ奏者を単なる器楽奏者とみるような人間ではなかった。楽器の向こうにある個人を理解し無理難題を押し付けることはしないし、またできない人であった。彼は管楽器パートの音程が求められるべき水準に達していないと認識していた。数か月の間、リハーサルのたびに30分以上かけて正確に音合わせをするよう団員を指導したが、結局音を揃えることはできなかった。アンチェルは状況を受け入れ、この状態から音楽を作り上げていくことにした。彼は同時代の指揮者達の称賛と尊敬の的であった。実際、ストコフスキーがニューヨークのアメリカ交響楽団の指揮者を引退する際に、後任者として真っ先に考えたのはアンチェルだったという。

彼の音楽解釈には聴衆を驚かせるような目新しさはなかったし、見世物的な発想を思いついたりドラマチックな効果を出すために音楽の品位を落とすこともなかった。むしろ演奏にあたっては楽曲に内在する意味を求め、すでに何百回も指揮した曲でもさらに深部を探っていった。彼は理想の指揮者ではなかった——そんな指揮者など存在するだろうか？ 彼は、ソリストたちとうまく打ち解けることができずにいた。コンサートでお決まりのように演奏される定番曲ですら、彼のパフォーマンスは時として冷徹かつ理知的にすぎ万人受けするとは言えなかった。とはいえ、彼はすこぶる正直で誠実な人物かつ音楽家であり、全てのパフォーマンスにおいて納得できる音楽を作ろうとしただけだ。彼ほどの手腕を持つ音楽家は今日の世界を見渡してもそうはいないだろう。裏心より冥福を祈る」

あるライブコンサートの終演後、「マエストロ、今夜の演奏に満足していらっしゃいますか？」と尋ねられ、カレル・アンチェルはひと呼吸して考えたのちこう答えた。「満足だ」と言える時がきたら、翌朝には引退を発表します。それはもう全て言い尽くして、それ以上語るべきものがなくなったということなのですから」

ほかでもないこの実直さについて、アンチェルの葬儀の席で友人ヤン・マティエクが改めて語っている。

「カレル・アンチェルが亡くなった今となっても、もっとどこかで彼に敬意を表する機会がなかったのかと悔やまれてなりません。現在活躍中である

アンチェルと同等の名声を持つ音楽家たちのなかでも、彼ほど音楽に対してひたむきに取り組んできた者はそう多くはいないでしょう。学び求める人々に向けて音楽の中に込められたメッセージを発信していくことを、彼は心底欲し続けていたのです。もちろんマエストロはその技に素晴らしく長けた方でした。

とはいえ、彼は音楽にのみ従事し情熱を傾けていたわけではありません。彼が身近に感じ愛している全てについて——つまりは、人生のささやかな喜び、小さくとも美しい母国へ深く根ざした愛、そして広々として輝きに満ち遙か彼方まで見晴らせる大地カナダへの愛——こういった物ごとを、たくさんの友人と共有したいと切に願っていました。カレル・アンチェルの謙虚な人物像や人間的芸術的遺産は、彼のもつあらゆる偉大さにとともに我々なきあとに伝えられていくことでしょう」

1995年1月 プゾンにて
原盤CD (TAH-121/3) 解説書より

「モルダウ」リハーサル



アンチェル：こんにちは。「モルダウ」から始めましょう。いえ、スメタナの《わが祖国》、6つ連作交響詩の2曲目でいちばん人気のある曲です。始めますよ。【♪～】

……冒頭からもう一度、フルートとクラリネット。みなさん、ひとつながりのメロディーをイメージしてください、ひとつの楽器の音のように聞こえては。2本のフルートでも2本のクラリネットでもなく、1本のフルート、1本のクラリネットのように。わかりますか？ どのフレーズもアクセントなしで。フルートとクラリネットだけ、初めから。【♪～】

最後の音を少しだけ長く（歌う）。【♪～】

……ありがとう、ありがとう。最初は弱く、次は強めに。クラリネットが始まる小節から——そう、フルートどの小節かわかりますね、いきますよ。

【♪～】

はい、ありがとう。テンポに気を付けて……1、1。
【♪～】

……そしてここにアクセント、ヴァイオリン、そう、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン……。1、

2、3、4、5、6、7、8、9——12小節目まで、クレッシェンドをお願いします。ピアノからメゾフォルテへ。そしてここはメゾフォルテ、次の小節はピアノ。いいですね、いちばん初めからお願いします、全員で……。【♪～】

同じテンポで。（歌う）……これが始まる小節、どこから始まるんだったかな、「A」という声を聞いて！ じゃあ「A」。1、2。【♪～】

……（歌う）違う、ここはひとつの流れのかたまりで（歌う）。私の言いたいことわかりますか？

奏者：はい。私たちのフレーズはこうになっていますよね？ 今おっしゃったようにひとつで弾くとすると（歌う）、2回だけですがここは両方とも——（譜面の）ここですが、それぞれ2回あるのでたぶん——（アンチェルが遮る）

アンチェル：ひとつで弾いてください。「A」はひとつで弾いてください。（歌う）

弦楽器「A」のところを一度お願いします。【♪～】

……はい、いいです……もっと弱音で、ピアノシモで。ピアノシモで始めたほうがよさそうですね。第1チェロも同じように（歌う）。もっとピアノシモで始めてください。「A」を全員でお願いします。

【♪～】（演奏に対して）いいですね。ここでフォルテ、クレッシェンド。……ここからオーボエ。テンポに気を付けて。

ありがとうございます。裏拍を短く、柔らかく。（歌

う) よろしいですか? それでは同じところをリピートしてもらえますか?

奏者: わかりました。【♪~】

アンチェル: ……アクセントを描えてください。……ひどい印刷の楽譜ですね。【B】のあと、1、2、3小節目ですかね。そう。アクセントは1つめと4つめの音、8つめ? 5つめでした、すみません。1つめ、5つめ、7つめ、……そして10個目。はい。3小節目。そのアクセントひどいですよ、3つめの音——

奏者: 3つめの音にアクセントですか?

アンチェル: いえ、3つめではなく5つめにアクセント、1つめと5つめ、1つめと5つめ。ヴァイオリンと同じアクセントです。ヴァイオリンとチェロお願いします、【B】のところ。ヴァイオリンとチェロ。【♪~】はい、そのとおり。【B】をもういちど、【B】を全員で。【♪~】

……オーボエ、木管、そして弦楽器は2拍子で、切れ味よく(歌う)、エネルギーに(歌う)、長くしない。そう、そうですね、2回目のリピートからやりましょう。【♪~】

……ありがとうございます。このセクションではホルンが少し弱いですね、なのでトランペットはホルンを助けてあげてください、フォルテではなくメゾフォルテをお願いします。ホルンはフォルテ、トランペットはメゾフォルテで。弦はすべてメゾフォルテで。メゾフォルテですよ、フォルテでは強すぎます。ホルン、一度お願いできますか? 「森

の狩猟」ですよ? ホルンだけ。オーケストラの皆さん全体がこの音を聞かないとだめです。

【♪~】……この小節はメゾフォルテで始めて、クレッシェンドしていきます(歌う)。この場面の始まりからテンポはそのまま、(歌う)、……1、2

【♪~】……いや、後半の部分はこうです(歌う)。

【♪~】……メゾフォルテ、クレッシェンド。2度目のメゾフォルテを書き込んでください、(歌う) それとクレッシェンドも。この小節を演奏してください(歌う)。【♪~】……はい、それでは全員でお願いします。【♪~】

……2回目はフォルテ・ピアノです、忘れないで。トランペット、先ほど練習したホルンが始まるセクション、もう少し強く演奏してほしい小節がいくつかあります……リズムを刻んでいる小節です(歌う)……この小節はもう少し強くお願いしますね。……このセクションのクライマックスは少しあとにきますよ、2/4拍子の小節のところ、1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12小節前。ここからクライマックスでディミヌエンドを始めて、ここより前では始めないでください。第1ヴァイオリン、リステツ・テンポの4小節前(歌う) そこはピアノで始めてください、ピアノニッシモでは聞こえませんでした(歌う)。ここはとてもワクワクするところです。6連符から4連符へ(歌う)。そしてディミヌエンド。それでは、もう一度「森の狩猟」をやります。ホルン・パートのソロ。

【♪~】……ディミヌエンド。テンポを描えて、そ

のまま……テンポに気をつけて……

ホルンお願いできますか? 【D】の第2小節。1小節半の間はフォルテ(歌う)……メゾフォルテ。農民たちが歌い出すのが1、2、3、4、5……6小節のあと。……もっとリステツ・テンポでできずか、典型的なチェコの民族舞踊ポルカのテンポなのです……チェコの農民はみんな太っているイメージがあるのか、ときどきひどくゆっくりしたテンポで演奏されます(奏者笑う)、(ゆっくりと歌う)「ああ足がパンパンだあ」、こんな風にね。そんなことはないですよ。もう少し軽やかに。では、リステツ・テンポでいきます。リテヌート(歌う)のあと、イン・テンポ。皆さんイン・テンポですよ。1…【♪~】…1、2……ホルン。ディミヌエンド…

…ありがとう、第2オーボエをカットして、第2クラリネットが代わりに吹いてください……E♭です。2小節(歌う)。この2小節のちょうどあと、3小節目であなた(編注: 第2オーボエ)が入る。はい、ありがとう。ここに文字が入っているはずですよ。

奏者: 「E」です。

アンチェル: そう「E」ですね。……【♪~】

はい、そう、ちょっと待って。最後の2小節の前の2小節、ここで止まって……息継ぎ。もう一度「E」をやります。【♪~】(歌う)【♪~】その調子。

……「E」のところはあまりよくありませんね。

木管楽器だけ「E」を1回お願いします。……小節線の前。そこがあまりよくないですね。【♪~】何かわからないな、なんだろう……第1バスーンは第1オーボエと一緒に奏でないと、第1オーボエと一緒に音を覚えていってください、遅れないで。4拍子をリステツ・テンポして、第1バスーンと第1オーボエだけ吹いてください。【♪~】音が線になってない、音をつなげてください。【♪~】はい、いいですね。全員で「E」いきます、「E」です。全員で。【♪~】

(歌う)【♪~】……弦楽器、エスプレッシブヴォでお願いします。

……はい(歌う)。ものすごく長く延ばして演奏してください、わかりますか? 長く、そしてディミヌエンド(歌う)、ひとつの流れで(歌う)。とても弱くしっかりディミヌエンドして、さっきのでは速すぎます。

もう一度「E」をお願いできますか、「E」を全員で。【♪~】……そう、良いですよ。そしてホルン。……もっとクレッシェンドしてください。……ピアノニッシモ。……ディミヌエンド。……

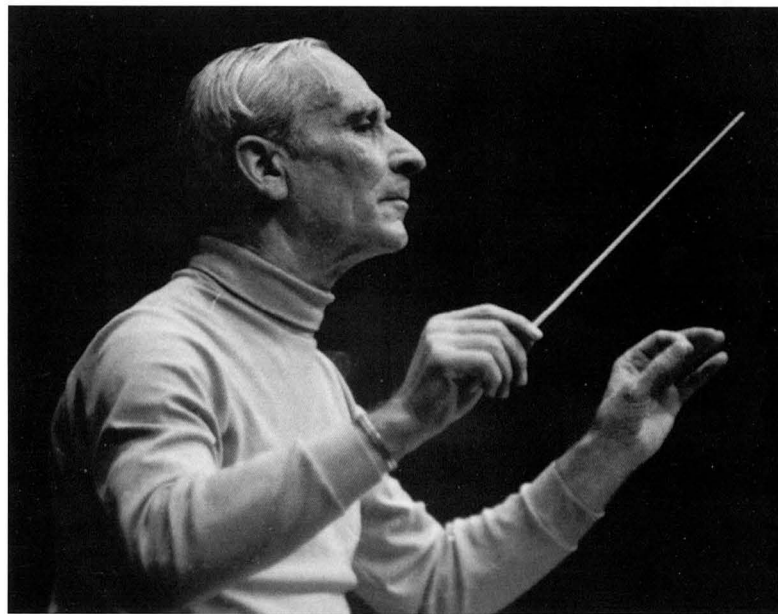
とまってください。今度はボコ・ビウ・モツソから、この場面のいちばん初めと同じくらいの速さで演奏してください(歌う)。そしてそのあとのイ長調(編注: ホ長調の誤りか)のところはモルト・ビウ・モツソ、木管お願いしますよ、アツェレランドで。そして6/8拍子の4小節前ではもうアレグロ(歌う)、そのままアレグロ、いいですか? とっても速くです。テンポ・プリモの前、1、2、3、4、5、6、7、

8、9、10小節前をください。そこに複縦線がありますか？

奏者：「G」と書いてあります。

アンチェル：ああ、本当だ。「G」です。「G」いきます。【♪～】

……違う、違う。ここは確実にスービト・ピアノで、意識して演奏してください。「H」のところを一度もらえますか、トロンボーンとダブルベースと第2チェロだけお願いします。トロンボーン、ダブルベース、第2チェロ。【♪～】すみません。そこはフォルテ・ピアノがありますよ。【♪～】……そ



うですね。ありがとう、ありがとう……。トロンボーン、特に第3トロンボーンとチューバ、第5、第6小節をもっと強く、それから第2トロンボーンのソロ、そして第1トロンボーンのソロも。ここはとっても大事です。ここはもっと強く、とにかくフォルテで、もう一度お願いします。フォルテ・ピアノ、フォルテのままで。【♪～】……1、イン・テンポ……クレッシェンド……そう、困りましたね、疲れが出てきてますね、これは問題だなあ。クレッシェンド、クレッシェンドからクライマックス。

弦パートやりましょう、第1、第2ヴァイオリンは「I」をお願いします、「I」です。1、2【♪～】……クレッシェンド……

はい、良いですよ、ここは1小節だけですが「K」の前のイントネーションに気を付けてください、1、2、3、4、5、6、7、8と11、11小節……。C♯とD♯の音がここでは重要です。「K」の前、1、2、3、4、5、6、7、8、9……11小節は、そこにC♯の音がありますよね。なんですか？

奏者：（何か質問をしている）

アンチェル：いえ、違います。（個別に対応している）……10小節でした。

「K」の前10小節を第1、第2ヴァイオリンお願いします、「K」の10小節前です。1、2【♪～】……はい、わかりました。

ホルンとトランペット、「H」いきます。いちばん初めの2小節はもっとフォルテそしてスタッカー

トで……とても大きさに。「H」を全員で……

【♪～】1、2、1、2……

そう。ちょっとお願い、教えてください、あれはどこだったかな。ビウ・モートの前、オーケストラの音楽が広々として力強いモルダウ川となって湧き出る部分……ありました。ホ長調のセクションの4小節前からアツチェランドで。（歌う。）1、2、1、2、1、2。そのあとはとてもアレグロで。「K」にいきましょうか。弦、スービト・ピアノニシモの小節まで、もっとクレッシェンドでください。

【♪～】

……ほら、イン・テンポで。

……譜面に書いてあるよりも早め、ページの真ん中あたりからリテヌートを私が始めたのに気が付きましたか？ でも、6小節、最後の6小節の初めの2小節がディミヌエンド、ピアノ・ピアノニシモ、音が全部延びすぎです。音は消えていなくて。ここ演奏してもらえますか。1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13（数える）24小節前から、いちばん最後から24小節前。

【♪～】……ゆっくりと……ディミヌエンド……そしてスッと音が消える……。いいでしょう。

【日本語訳・編集 松井美奈子、石川祥子】

楽曲について

●スメタナ：連作交響詩《わが祖国》

19世紀チェコ国民音楽の始祖スメタナ（1824 - 1884）が作曲活動を始めたのは1840年代のことだが、当時チェコは文化的にも政治的にもドイツ＝オーストリアの影響を強く受けており、スメタナがはじめピアニストとして音楽活動を始めたのも、シューマンとショパンの強い影響からだ。とくにシューマンからの影響は顕著だったが、シューマンはスメタナの創作するピアノ曲にあまり関心を抱かなかったという。そうした折に、スメタナの作品を擁護したのがハンガリー出身で全ヨーロッパ的なヴィルトゥオーソとして名声を博していたリストだった。スメタナはリストとの出会いによって、当時高まりを見せつつあった民族主義にめざめ、その高まりに身を投じていくことになる。しかし、自国の音楽文化を創造するという使命をもったスメタナであったが、彼はまず母国語であるチェコ語を習得するところから始めなければならなかったほど、当時のチェコでは「ドイツ化」が進んでいたのだった。母国語を習得する過程でスメタナは、自国の歴史に強い関心を抱くようになり、さらにリストとの交流のなかで、1856年に「交響詩」という文学・歴史的な内容を盛り込みやすいジャンルを知ることにになり、その2年後の1858年にスメタナの初めての交響詩となる《リチャード3世》が作曲された。

その後、スメタナは1863年にチェコの国民歌劇の誕生を告げるオペラ《売られた花嫁》、1872年に

はチェコ建国の女神リブシェの伝承にもとづくオペラ《リブシェ》を作曲し、強力にチェコ国民音楽を推進していった。連作交響詩《わが祖国》の構想は《リブシェ》の作曲過程で、リブシェが嫁いだといわれるブシェミスル家の居城であったヴィシェフラドの伝説を音楽化しようとしたことから始まる。そして第1作の《ヴィシェフラド（高い城）》が完成されたのは1874年で、その後1879年に最後の第6曲《ブラニーク》が完成する。

*

交響詩《ヴィシェフラド》（1874）

「高い城」という邦題でも知られる第1曲《ヴィシェフラド》は、詩人がヴィシェフラドの廃墟を前にして過去の栄光と没落の物語を詠うというもので、ハーブによるヴィシェフラドの栄光を語る詩人の印象的な竖琴の響きではじまる。この主題は、冒頭の解説で述べたように、スメタナのイニシャルに基づいており、詩人＝スメタナがチェコの建国の輝かしい伝説に思いをさせ、チェコの民族意識の高揚を歌い上げる内容となっている。

交響詩《ヴルタヴァ（モルダウ）》（1874）

チェコ民族の象徴といえるヴルタヴァ（モルダウ）の流れを音楽化したものだが、そこには過去から現在に向かって大きくうねるブラハの歴史が重ねられている。音楽は、ヴルタヴァの2つの源流の小さな流れがしだいに大きな流れとなり、「森の狩り」や「村の婚礼」「月の光と川の妖精の踊り」といった情景を描きながら、「聖ヨハネの急流」を経て、ブラハ市内の「力強い流れ」のクライマックス

が導かれる。そして最後の《ヴィシェフラド》の主題が、ヴルタヴァの流れがチェコの歴史の象徴でもあることを、強烈に印象付けている。

交響詩《シャルカ》（1875）

標題となっているシャルカは、ギリシャ＝ローマ神話のアマゾネス伝説のチェコ版のプラスタ伝説に登場する女兵士で、過去に男に裏切られたシャルカが、みずからが囃子となって自軍を導き、ボヘミアの騎士たちに復讐をするというもの。幻想曲風の作品で、独立して演奏されることは少ないが、交響詩全体をつなぐ転換を示す作品である。

交響詩《ボヘミアの森と草原から》（1875）

この作品は伝説に基づく標題をもたない点で、《わが祖国》のなかでも異質の作品である。スメタナによれば、この作品について「ボヘミアの自然を見たときの感興である。牧場や森のいたるところから楽しげな歌や悲しげな歌が聞こえてくる。（……）だれもがそれぞれの幻想を描くことができる」と書いている。

交響詩《ターボル》（1878）

これまでの4曲と大きく異なるのは、この作品と、これに続く《ブラニーク》が、チェコの近代史における歴史的な事柄を描いていることである。ターボルとはブラハの南にある町の名前で、フス戦争（1419～1436）の際にここを根拠にしたフス教徒（ターボル派）と、ドイツ出身のボヘミア国王軍・教皇軍の連合軍との戦いを描いている。みずか

らの力でチェコ民族の宗教的アイデンティティと民族主義を勝ち取った過去の歴史への強烈な思いにあふれた作品である。

交響詩《ブラニーク》（1879）

前作《ターボル》と対をなす作品で、前作でも用いられたフス教徒の賛美歌《汝らは神の戦士たれ》や、《汝らの側の神とともに、終末において勝利を収めん》などが効果的に用いられている。ブラニークは、フス教徒の戦士たちが戦いに備えて集っていた山の名前で、2つの賛美歌に導かれて、戦いに勝利する過程が描かれる。最後のフィナーレでは、第1曲《ヴィシェフラド》のテーマが高らかに響きわたり、過去の建国の歴史と現在とが強い絆で結び付けられることになる。

（江森一夫）